

〈第2回〉

第2回 東川賞の選考をめぐって

重森 弘淹

新しい作品としてわれわれが注目する場合、まずそこにはかならず斬新な写真的思考が表現されたものが根底に在る。東川賞の国内作家賞となった篠山紀信氏の一連の「シノラマ」は、より広くより深くといった従来の写真に託された視覚的欲望を、さらに多面的多角的に発展させようという思考が働いている。写真というメディアのときどきの新たな展開には近代人の視覚的欲望を刺激する新しいメカニズムや手法の開拓がつねにあった。「シノラマ」は「シノラマ」という新しい未知の写真視覚に挑戦した点で、まことにスリリングである。

新人作家賞となった林隆喜氏の「ZOO」は、動物園という人工空間をとらえたものだが、その空間に飼育されている動物たちの姿は、あたかもわれわれの現代的状況、つまりは疎外の状況を象徴しており、深く内省を迫ってくる。表現とは批評性を内につねに鋭く存在させているものである。動物園に借りて、現代の文明状況をえぐりとっているこの作家の眼差しは、鮮烈である。

特別賞の関口哲也氏の業績は、北海道という恵まれた自然を題材にして深く愛し、その観察から生まれた数多くの作品群は、その地に居着いた人間にのみ可能な底深さがある。発表の場が中央に片寄っている現状の中で、着実に自分の写真の道を貫いている姿勢は注目されてよいと思う。

最後に海外作家賞となったフランスのルシアン・クレルグ氏は、人体、自然、静物など幅広い題材を通して、つねに対象世界に信仰的なまでの謙虚さで対峙する。このヒューマナなカメラ・アイこそクレルグ氏を巨匠の地位に据えたのであった。またクレルグ氏は、フランスのアルルで十年来毎年夏に国際的なフォト・フェスティバルをコーディネートし、注目をあつめて来た。写真の町東川の構想も、アルルを良き先例として念頭に置いてきたという点でも海外作家賞にふさわしい業績といえるのである。

「新人」という画す意味は、すごく難しいけれど、一応選ばれた作家と作品に対する各位の意見を踏まえての新人作家賞選考ということになった。これは、他の部門も同様である。

対象となった作品、あるいは書籍については、なるべく他で受賞されたものは除く、ということで選者一同対話に入ったものの、甲論乙駁、かなりの時間を費やして最終的に三点を選び各自、それぞれ意見を述べながら対立もまた止むを得ないことながら、結果として林隆喜君の「ZOO」に決定した。

国内の動物園という限られた場所での空間把握の巧みさは感覚的にも技術的にも卓抜したカメラアイであり、新人作家賞として判断されても異論もなく納得できた。

大坂寛君のJPS展を含めた最近作が提出されていたが、この人の作品は、むしろ印刷より、オリジナル原画の技巧にあるとされる。今日、これだけのプリント技術は内外を通じても稀有に属するとみたが、提出された印刷物では、その片鱗をうかがうのみで、林君に譲らざるを得なかった。

前後するが、最終的に「国内作家賞」より、むしろ新人作家賞の方へということで長倉洋海君の「エルサルバドルの民衆」が候補に上がった。ドキュメントの強烈な印象を他の作品と比較することの難しさを痛感したものの、林君の新鮮な巧みさに傾いたが、この三点何れに軍配を上げて異論のないことは選考委員の一致した見解であった。

〈第3回〉

第3回東川賞の選考にあたって

審査委員長 重森 弘滝

第三回目を迎えることになった本賞も、数ある写真賞の中でそろそろ自らの性格と方向づけが、各審査委員相互の議論のうちに看取されるようになったのも必然である。

それは東川町が恵まれた自然環境に位置しているところから、現在危機的な状況にある自然と文化の在り方に対する、なんらかの積極的なコメントが、写真家の眼差しに貫かれているかどうかということに他ならなかった。その点で、国内賞となった奈良原一高の写真『ヴェネツィアの夜』、『ヴェネツィアの光』は、十一世紀に建立されたヴィザンティン様式のサン・マルコ大聖堂を中心にしたこの都市の栄枯盛衰をとらえており、すでに歴史の闇の底に沈んだ中世都市に光を放って浮上させた労作である。そして現在水没の危機にあるこの都市を西欧文明の挽歌として聞きとろうとする作者の眼差しによって、文明と永遠についての深い思索が映像として結実しているのである。

新人賞は最終的に今道子『EAT』と関口隆史『UZURA』が競ったが、どちらとも食物、料理がテーマとして共通していたことは注目に値いしよう。ファッションとしてのグルメ文化について、この二作は結果的に鋭い批判となっている。とりわけ『EAT』は日常の食卓を華麗な幻想の花で飾り、改めて人間の食物に対する文化的な欲望の深さについて、ひきずり込まれるように考えさせられる。食卓をひとつの文化的テキストとして解釈しようとする作者の、女性としての新鮮な発想に衝撃を受けたのである。

海外賞のジョール・マイヤーウィッツは、代表作に『ケープ・ライト』（1979）、『セントルイスとアーチ』（1980）を持つアメリカ気鋭の作家で、都市を構成するさまざまな要素、即ち建物、景観、市民の日常的なドラマをとらえ、都市の構造的虚実をカラーや大型カメラで展開する。都市がこれほど魅力をもった幻想的な空間であったのかと今さらのごとく思わせる作者の手腕はダイナミックである。ここでも都市はさまざまな視座から読みとらねばならぬ文化的なテキストであることが提示されていて、示唆的だ。

特別賞となった神部弘二の写真集『自然・花そして空知川』は、北海道在住のアマチュアが、こつこつと長年にわたって自然を採取してきた誠実な眼差しに溢れている。自然は誠実に対するとき、その内側から作者を包みこもうとする。そこに自然との間の至福な感情がにじみ出て来る。これは、つつましい叙情詩的な自然讃美の写真集である。

（第3回 東川賞審査会・昭和62年4月16日 東京都）

〈第4回〉

第4回東川賞の選考にあたって

審査委員長 重森 弘淹

このところ世界のあちこちで、国際的な写真フェスティバルが開かれるようになった。たとえば、今年2月26日から1ヶ月間にわたって開かれた、ヒューストン国際写真月間（アメリカ・テキサス州・ヒューストン市）は、ビエンナーレ（隔年開催）形式で、今回がその2回目にあたっている。私はこれに「日本の近代写真—1920～1940」という写真展を組織して参加したが、世界各国から約80ほど写真展が集まった。むろん期間中、各イベント、ワーク・ショップ、講演会が催され、また、世界の写真人と交流できたのであった。すでに東川町国際写真フェスティバルの情報も届いており、さらに東川町からも現地に招かれ赴いたりしており、近い将来、交流の機会が生まれることも十分に考えられる展望を持つことができたのである。

こうした現状を踏まえて、東川賞の選考も国際的な視点を考慮する必要があるだろう。東川が国際的なフェスティバルを謳っている以上はなおさらのことである。その意味で、今年の海外作家賞がまず、ルイス・ボルツの諸活動に与えられたのは悦ばしいことだった。ボルツはアメリカ西海岸で制作を続けている写真家だが、たとえば写真集『パーク・シティ』（1981）にみられるように、ソルトレーク・シティに近いリゾートタウンのパーク・シティが、住宅団地の進出で、その景観が無残に変わって行く姿を冷静に凝視（みつ）めている。この現実には日本でもあちこちの周辺におきていることだが、それを人間のエゴの風景としてとらえたドキュメンタルなランドスケープである。

国内作家賞は、はからずも審査委員である植田正治氏に与えられたが、すでに国際的な評価の高い人である。氏の生地に近い鳥取砂丘は初期の頃からの親しいモチーフで、とりわけ近年は砂丘を舞台として、さまざまな写真的パフォーマンスを展開し、それを祝祭的な光景としてとらえている表現には、現実と幻想が交錯した不思議さがある。

新人作家賞の伊奈英次氏は、8×10インチという大型カメラで、都市の無機質なテクスチュアに挑んできた新鋭で、受賞作『ゾーン』は、巨大なアンテナ基地のアンテナ群が、虚空を抽象的な線で構図化していく、今日的な風景としてとらえたものだった。その風景への着眼点は文明批評的ですからある。

特別賞の竹田津 実氏は、キタキツネの生態を、一人の獣医師として、キタキツネから人間に送り続けるメッセージを受けとめようとするカメラ・ワークである。人間と野生動物の共存をシリアスに考えさせてくれる、誠実な記録といえよう。

（第4回 東川賞審査会・昭和63年3月4日 東京都）

〈第5回〉

東川賞選考経過

第5回を迎えるにあたって

東川賞審査委員長 重森 弘淹

はやいもので東川町国際写真賞も5年目を迎えた。第2回の海外作家賞を受賞したフランスのルシアン・クレルグ氏が、記者会見の折、氏が中心となって運営してきたアルル・フォト・フェスティバルの経験から、まず最低10年続ける努力をすることと、われわれに要望された言葉が今も耳に残っている。ただ続ければよいというものではないが、続けることで写真文化の地域への浸透が深まり、また写真というメディアに対する再認識も広がっていくことだけは確実である。ところで昨春、アメリカのヒューストン国際写真フェスティバルわれわれも参加したが、世界から集まった写真人から、東川のそれが注目され期待されていることを知り、また写真による国際文化交流の輪が新しく生まれ、この賞の存在意義も確認することができた。とりわけ今年は写真誕生150年という記念すべき年に当たっており、世界的に写真のイベントが展開されることになっている。その意味で第5回を迎え得たことは喜びの限りである。

それでというわけではないが、本年の海外作家賞に、中国写真界の長老石少華氏の代表作品集「石少華作品集」と、氏の中国写真界を育成された功勞に対して選ばれたことは意義深い。過去、アメリカ、フランスの写真家たちが受賞してきたが、ここに到って中国の写真家の受賞が決まったことはわれわれとしても喜びに耐えない。とくに東川町は、戦中から戦後にかけて中国とのさまざまな交渉の歴史があったことも偶然とはいえ、新たな文化交流の端緒を切り拓くものとして期待しないわけにはいかない。

国内作家賞の渡部雄吉氏は、ベテランの報道写真家として長いキャリアをもった人だが、氏のライフワーク写真集「神楽」は、この神事が民衆の日常の信仰とどのように結びついてきたかを明らかにしている点でも、類をみない成果を挙げている。

新人作家賞となった築田純氏の写真集「スポーツシアター」は、スポーツ競技をドラマとしてとらえ、競技の場を劇場として設定した視座は、従来のスポーツ写真の枠を超えた新鮮さを提供しており、新人というにふさわしいカメラ・ワークとなっている。

特別賞の佐藤雅英氏の「Boys, be ambitious! 北海道大学旧恵迪寮写真集」は、今は消失してしまったこの寮の日常の描写を通して、青春のシンボルとしての歴史を浮かび上がらせている。たんに北大寮生のシンボルであったばかりでなく、北海道の人びとにとっても、わすれることのできない建築だっただけに、この記録が残された意義は大きいといわなければならない。

こうして本年は、バラエティに富んだ作品に対して賞が与えられ、かつてない特色を持ち得たことは、賞選考にあたったわれわれとしても望外の喜びであった。

〈第6回〉

第6回東川賞 審査報告

審査委員長 重森 弘滝

昨年はギャラリーも開設され、受賞作品の収納展示の面でも、またフォトフェスティバルの作品展示の面でも画期を迎えることになった。

この画期の年にまず国内作家賞として選ばれた村井修の「石の記憶」は、庭石、石畳、石段、石垣、石壁、石橋、礎石、石仏、石塔、磨崖仏、石棺、石塚、石洞など、要するに古代信仰や仏教信仰の象徴物から伝統的な生活環境造形に応用された石の姿を網羅したものである。要するに日本人が古代から石に託してきた集合表象にレンズが向けられ、また石の造形にみられる日本人の美意識の在り様にまで及び、モノいわぬ石に刻みこまれた日本人の記憶を呼び醒まそうとする意欲作である。作者はベテランの建築写真家である。単に建築素材としての石ではなく、物神化物としての石に着目した眼差しは鋭い。

新人賞となった佐藤時啓は彫刻から写真の世界へ入ってきた異色の存在である。とくに1988年から90年にかけての作家活動はめざましい。8×10インチの大型カメラのシャッターを開いたまま長時間露光し、その間にペンライトやストロボで光の軌跡を描き、四次元的な空間表現を試みている。その軌跡は広場や地下の機械室に侵入したり、また一転して溪流やその河原に飛遊する。かと思えばオフィスの室や廊下にも現出する。こうして日常的、人工的な空間から自然や人為的風景の中へまるで幽霊のようにあらわれる。フランス語のフォトジェニイという言葉は「光の精霊」を意味するが、これはフォトジェニイの再現といってよい。これまでほとんど類例のないこの前衛の仕事に新人賞が与えられた意義は大きい。

海外作家賞にはメキシコの女流、グラシェラ イトゥルビーデの「ジュチタンの女たち」に与えられた。彼女は生粋のメキシコシティっ子で、1942年生まれ。メキシコ中央映画撮影所を経て、メキシコの巨匠マヌエル・アルバレス・ブラボウに師事し、頭角を表した。原住民インディオとその血をひく混血のジュチタンの町に住む女たちの、土俗信仰と一体となった日常を力強くとらえたもので、1987年、ユージン スミス賞を受賞している。従来わが国であまり知られていなかった中南米の写真家にスポットが向けられた意義は大きい。

特別賞は、北海道出身で、広告写真家としてつねに第一線で多彩な活動を続けてきた操上和美の功績とその作品に与えられた。なかでもシリアス作品「クラッシュ」は1989年5月東京の原美術館で大個展として展示されたものであるが、オブジェ、人物などを高度なテクニックでとらえ、氏の広告表現の原型的なイメージとしての意味を持っている。むしろ国内作家賞として本来受賞してもいい普遍的表現性を備えた作品だが、北海道出身者として、しかも国内でもっとも活動してきた功績も無視することはできないという理由で特別賞となった。特別賞が与えられたことは、これまで以上にこの賞に重みを加えることになった。

〈第7回〉 選評が見つかりませんでした。

〈第8回〉

〈選評〉 第8回東川賞について

東川賞審査委員会・委員長 重森 弘淹

第8回を数える東川賞の選考には、これまでから格別の方針や方向性があったわけではない。方針や方向性が賞の性格にある種の制約を与えかねないことをむしろ恐れたからである。審査会では、可能なかぎり作品を収集し、その中からもっとも質的に秀れた作品を見出すことに全力が注がれているだけである。

さて、今回は海外作家賞を除く国内関係の作品は、作者の内部現実が深く掘り下げられた〈私〉性の強い作品が揃った。

まず国内作家賞の橋口譲二氏は、ここ10年ほどめざましい活動をして来た写真家だが、その作家活動の発端となった場所、ベルリンを、あらためて新しく取材してまとめた写真集「BERLIN」がとくに注目された。周知のように1989年末から90年にかけて〈ベルリンの壁〉が崩壊した。この写真集は1990年末から91年2月にかけて撮影されたもので、この壁の崩壊という歴史的イベントを挟んで、しかしこの10年間、何故ベルリンに魅きつけられてきたかを問い、その答えを、古く美しく朽ち果てたようなプレントラウアーベルクという街に見つけようとしている。その街は19世紀末から20世紀初めのベルリンが、まさに現実に息づいているようであり、作者の心を騒がし、揺り動かしていたものの正体は、この街角を流れている時の澱みだったと気がつくのである。従って作者のベルリンはこの街に集約され、私的な感慨を織りまぜた紀行写真となっている。とりわけこの街で出会ったさまざまな人や建物や事物は、そうした作者の一種の感傷のオブジェのようでもある。むしろ、作品は感傷に流されているわけではない。珍しく二眼レフを使ってその感傷の正体をシャープに突き止めているからである。いずれにせよ、私的な眼差しの貫徹したドキュメントである。

新人作家賞はオーストリアのグラーツに住む古屋誠一氏の、まことに深刻な私的な記録「Memoires」に対してである。この記録はオーストリア人の夫人が自裁するまでの痛切な経過を、まだ健康だった頃の姿や日常や風景を織りこみつつ追ったものである。精神的にも肉体的にもやつれ果てていく姿を、夫としてどうしようもなく凝視めるほかはないその経過は、まことに救いのない、氷りついたような年月である。ともあれ、作者は、この苦痛な現実から逃げようとせず、精神的葛藤に耐えつつ見据えている。写真とはなんという記録装置なのかと思わないわけにはいかない。

特別賞は、上川郡美深町出身の深瀬昌久氏である。氏の作家歴はすでに周知のとおりであるが、1991年、作品集「FAMILY」を出し、あらためて故郷と故郷での家族のつながりを、家族の記念写真という形式を通じて確認している。氏の父は写真館を営んでいる。作者はかつてそれを継ぐべく東京で写真の勉強を始めるが、結局故郷には帰らない。故郷の実家にはだんだん年老いていく、父夫婦、故郷にとどまった弟夫婦やこの地で嫁いだ妹夫婦の家族に、ときに腰巻の裸のモデルも入れて、大型カメラで撮っている。記録は19

71年に始まり、父親が死んで廃業した写真館を1990年に撮って終わっている。これは20年にわたる写真による家族史だが、そのこともさることながら、作者の家族や故郷という血縁・地縁の深さ、その深さにたいする屈折した愛情が、この単純な記念写真の形式を通じて語られているのである。

さて、海外作家賞は、イタリアのオリーボ・バルビエリ氏である。作者は1971年から写真を始めているので、20年のキャリアを持った写真家である。1989年に発表された作品集「NOTTE」や「NOTO」（1990）は、古い都市の夜の光景を撮ったカラー写真である。時間の停止したような時空間は形而上的イメージが浮上している。作者はこの他に中国本土や香港・台湾の、やはり夜景を交えた幾冊かの作品集を発表しており、いづれもエキゾチックな紀行写真だというばかりでなく、カラー写真そのものとしても新鮮である。伝統と現代が超現実的な風景を人工的に表象しており、たんなる紀行写真家でないことを十分に実証した作品群である。

〈しげもり・こうえん〉



〈第9回〉

〈選評〉第9回東川賞について

東川賞審査会・委員 平木 収

1985年6月の『写真の町』宣言が、さほど遠い過去のこととは感じられないにもかかわらず、東川賞及びフォトフェスタも、当年で回を重ねること早9回目で、来年は節目の第10回を迎える。構想期間を含め9年余という歳月は、東川賞やフォトフェスタの存在の周知に一定の成果をもたらしたこと、そして写真を通じて幾多の人々の出会いや再会を実現してきたことは明白である。しかし、この9年という時の流れの中で、我々は悲しい事態に出会うことも余儀なくされた。それは、東川賞の設立やフォトフェスタの実現に準備段階から関わられ同賞審査会委員長の重森弘淹氏が、昨秋、薬石効なく無念の他界をされたことである。氏の志は残る審査会メンバーと新任者が受け継ぎ、本年度の受賞者選考も例年通り、ノミネートにご協力いただいた各位の意を最大限に尊重し、入念な作品検討と厳正かつ真摯な討議の末に、下記の理由をもって、別掲のように決定した。

東川賞国内作家賞の高梨豊氏に関して授賞理由をあえて挙げるなら、近刊の写真集『初國』とその写真展、並びに1988年の写真集『都の貌』の刊行といった業績に対してということになる。しかし氏はすでに1966年の作品『東京人』や1974年の写真集『都市へ』といった仕事で、現代の都市中心社会における時代精神を表現する作家として、不動の地位にある。その氏に対する今日の授賞決定は、従来業績に加えて、日本の精神風土の原点を模索するといった壮大なテーマへの取り組みに敬意を表してのこととご理解いただきたい。

また新人作家賞の猪瀬光氏については、特記すべきことが多くある。まず、猪瀬氏の選考材料だが、個展『猪瀬光1982-1992』（於 I.C.A.C.ウエストン・ギャラリー/東京）と並びに雑誌『Deia-Vu』の11号所載の作品集を対象とさせていただいた。わけても後者を直接の討議材料にしたのだが、そこには氏の既発表作品が網羅的に納められていて、好都合でもあったからである。これはまた氏が寡作な作家であることも示しているが、その少ない制作数の中で、作家・夢野久作の幻想的世界に促されて緒についた『ドグラ・マグラ』と題されるシリーズ作品が、巧みに現実をも越えた表象性の高いリアリティーを醸していることと、その強靱な表現意欲に対する評価で賞決定の運びとなった。審査会の席上でも、同氏は同世代の写真家と比べてもとりわけユニークであり、こうした写真家を支持することの必要性が確認されたことを付記しておきたい。

また特別賞は小樽市出身で札幌市に在住し、その仕事のフィールドを広く北海道全域、いやさらに世界全域に持つスケールの大きい航空写真家・清水武男氏に授与することを決定した。選考時に対象とさせてもらった作品群は、『北飛行』（1989）と『遊飛行』（1991）の2冊の写真集だが、前出の通り、氏はユーラシア大陸から南米までをその“眼下”の被写体としたことのある飛行時間3000時間を超すベテランである。だが郷土北海道の撮影ぶりを写真集に見る限り、手慣れた感じというよりは、景観を手塩にかけて人に伝えるといった感もあり、その新鮮な大地への感性がとてすがすがしい。画面のグラ

フィックな構成力も魅力だが、ディテールの妙も格別である。こうした総合性が授賞の理由となったことはいうまでもない。

今年の海外作家賞は、太平洋オセアニアに眼を向け、その地域を重点的にリサーチした結果、オーストラリアのシドニー在住で中国系オーストラリア人のウィリアム・ヤン氏の『STARTING AGAIN』（再出発）が選定された。同氏はオーストラリア東部のクィーンズランド州出身で、選考対象となった作品集も同州立大学時代の知人や、ヤン氏自身の家族ら、作者を取り巻く多くの人物が登場するプライベート・ドキュメント作品である。移民社会であるオーストラリアの日常と、そこに生きる個々の感性や感情を人間味豊かに綴った珠玉の写真文集で、近年稀な正統派であり、こうした作品を紹介できることは審査会としても喜びである。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉

〈第10回〉

〈選評〉第10回東川賞について

東川賞審査会・委員 平木 収

1994（平成6）年は、東川町にとって、町の開拓100年という特別の年だという。そして内外の秀れた写真家に贈られる東川賞にとっても第10回という節目の年に当る。1985（昭和60）年、東川町は“写真の町”を宣言し、東川賞の制定と国際写真フェスティバル“フォトフェスタ”の開催が緒について、早10年が経過したが、振り返るに、過去9回の受賞者の諸氏は、世界的な活動を続ける現代写真界のリーダーから、地域に根ざした地道な写真活動を営む作家、あるいは新人として見出されその後の活躍で一回りも二回りも大きくなった写真家と、多彩をきわめている。そして本年も、例年のごとく広範な協力者各位の真摯なノミネートをふまえて、国内作家賞、海外作家賞、新人作家賞、そして北海道に縁のある作家を対象に設けられている特別賞と、各々の東川賞を選考した。以下はその経過及び委員会としての講評の要旨である。

まず、東川賞国内作家賞は、アメリカインディアンの今日、そしてその歴史と血脈を、ストレートな肖像写真という手法で語り上げた新正卓氏の「曾長の系譜」（講談社刊）が、審査委員会全員の圧倒的な支持で、当然のこのように決定された。移民一世や戦争残留孤児など、すでに秀れたドキュメンタリー作品を完成している作者としての実績も併せて評価され、新正氏の写真への取り組みは、東川賞の精神に照らして十二分に満足のものとの判断により、記念すべき第10回の国内作家賞を贈ることに決した。

昨年は初めて南半球オーストラリアの作家に贈られた海外作家賞は、本年の対象ゾーンを北アメリカのカナダに向け、山岸委員がその調査に携わり、労の甲斐あって豊かな資料が集められた。それを委員会が厳選し、写真とう手段を知的な生き方の模索に使いながら作家としての表現、それに教育という次代へのメッセージを創造しているミッシェル・カンポウ氏に授賞を決定した。審査の過程では、老い（エイジング）の問題をユニークな老婦人のヌードで表現したドニガン・カミング氏や、カナダの大自然を大型カメラで生け捕（撮）りにしているエドワード・ブルティンスキー氏らの作品が競い合う一幕もあったが、東川賞の持つ地域社会と文化の醸成というテーマをかんがみ、カンポウ氏への授与が合意された。

新人作家賞は、ユニークでしかもきわめてオーソドックスな生物写真家に贈られる。

滋賀県の琵琶湖畔を活動拠点にし、そこで水生昆虫を始めとするさまざまな虫たちの写真昆虫記を著しながら、一方でははるかアフリカにまで赴き、いとも愛くるしいスカラベたちにまなざしを注ぎ続けている今森光彦氏がその人である。スカラベは通称糞ころがし。草食獣の糞を丸くカットして、巣や安全な場所までころがして運ぶユーモラスな虫で、古来エジプトの昔から、人間の関心を惹き続けてきた昆虫である。そのスカラベ写真と昆虫記のどちらも、いまや国際的に評価されるに至っている今森氏が今回の新人作家賞である。

さて、特別賞は、戦乱の地エルサルバドル、アフガニスタン、そして南アフリカを、世界狭しと駆け巡り、しかし流血の現場だけでなく、動乱の中でひたむきに生き続けなければ

ばならない一般市民、そしてとりわけ子供たちに愛情溢れるまなざしを向け、他に比類のない心温まるドキュメンタリーを撮り続けている報道写真家長倉洋海氏に贈ることになった。氏は北海道釧路市の出身である。この決定も10回にふさわしく、公正な社会の実現をめざして奔走する長倉氏が、道内外の青少年にアンビシャスな希望の星として輝いてくれることを願ってのことであった。

今回受賞の4氏に共通することがあるとすれば、各氏ともきわめて自主的な意志で、しかしその効果は広く社会に影響力を持つ仕事をしている点を指摘できるだろう。こうした各作家の姿勢は、写真という手段を通じて、情報化社会である今日の、文化の基盤を整え、芸術の展開に大きく寄与することだろう。審査会は本年もまた、この決定を悦ばしく思っている。

なお文末ながら、第10回で第1回より審査に携わってこられた審査会長の渡辺委員と山口委員、小池委員、長友委員が任期を満了される。先年他界された審査委員長重森委員の労ともども、記してここに各委員の先駆的活動とそのご指導に謝意を表したい。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉

〈第11回〉

〈選評〉第11回東川賞について

東川賞審査会・幹事委員 平木 収

今年の東川賞審査委員会は、昨年の第10回東川賞選考審査をもって、10年間という永きに亘る任期を満了された審査委員長渡辺義雄、山口昌男、長友啓典、小池一子各氏が退任された後を受けて、新たに写真家・長野重一、グラフィックデザイナー・杉浦康平、ジャーナリスト・筑紫哲也各氏が審査委員として参加され、代表委員を植田正治氏が務めることになった。旧委員諸氏は、東川賞創設時から多大な労をもって選考に携わっていただき、今日の東川賞を不動の位置に導かれたことに、現職委員、新任委員共々、記して敬意と謝意を表しておきたい。

さて、今年度の東川賞選考会は、去る3月下旬、世情騒然とする東京で開催され、ノミネートにご協力いただいた関係各位と、海外作家賞の調査にご尽力いただいた皆様のお力添えを得て、次のように決定した。まず、第11回東川賞の海外作家賞は、隣国韓国で永年アジア諸国のシャーマニズムをテーマとして写真取材と制作活動を続けてこられたキム・スーナム（金秀男）氏に決定した。キム氏は、韓国の永い伝統に培われた文化風土を背景に、東アジアのシャーマニズム全般に亘る調査を敢行し、すでに斯界では国際的に高い評価をうけている写真家であり、民俗学の研究者でもある。

ちなみに今年度は韓国圏に視界を向けて、東川賞海外作家賞のノミネートと調査を行ったが、昨年12月、ソウルに委員の平木が赴き、資料の収集等に当たった。その折りには、ソウルの写真評論家のキム・スンコン氏が公正な立場で、材料や資料の収集に協力していただいた。その甲斐あって、約40件に上る写真集や資料が集まり、審査会でも韓国の現代写真の今日的動向をも踏まえつつ、キム・スーナム氏の業績の意義を認識することができた次第である。

次に、国内作家賞であるが、同賞は東京とニューヨークという二大都市を拠点に制作活動を続け、いまや国際的にきわめて高い評価を受けている杉本博司氏に贈ることを決定した。杉本氏は、80年代に、アメリカの旧き良き時代に建てられた豪華な内装の映画館を、独特な手法で撮影した写真作品で、一躍国際的な名声を博したことに始まり、続いて自然史博物館のジオラマを写した作品シリーズ、またグッゲンハイムの奨学金を授与されて制作を始めた世界各地の海の風景シリーズと、高密度、高水準を維持しながら制作に励み、現代美術の世界でもすでに確乎たる地位にある作家である。その明快にして知的なコンセプト・ワークは、写真というメディアにおける現代の美術制作の最良の例として、国境や地域を超えて多くのファンを持っている。写真の可能性と現代美術の関係を考察する上に、今日最も重要な作家に、賞を贈ることを、東川賞審査会は、喜びとするところである。

新人作家賞には、瀬戸正人氏が決まった。同氏は、これまた汎アジア諸国とそこに生きる人々の暮らしや日常性について造詣が深く、その成果のひとつが、東京に暮らすアジアの人々のドキュメンタリーとなって発表されている。『リビングルーム』と題されたその作品は、手狭な東京のワンルーム・マンションにそれぞれの城を築いている各国の人々の暮

らしを大型カメラで撮影した作品で、一部は雑誌にも掲載されたが、プリント作品としては、ロール状の印画紙に各辺1メートル前後の大画面を連続して焼き付けた30メートル近い長大な作品である。先に本格開館した東京都写真美術館のこけら落しの展示にも出され、好評を得ていたことが授与に大きく作用した。

また、北海道に関係の深い作家に贈られる特別賞は、永年北の大地にタンチョウの雄姿を追ってこられた動物写真の先駆者、林田恒夫氏が受賞者である。林田氏の撮影になるタンチョウは、我が国の紙幣の図案にも用いられるなど、国民的な身近さにある。また、多くの後進を世に送り、今日の日本のネイチャーフォトの隆盛を北海道のフィールドから支えてこられた業績はじつに貴重で、その功をたたえて審査会全員が林田氏を推挙した。この賞が契機となり、さらなる制作を続行されることを願いながら、審査会は結論を出したことを申し添えたい。

今年度の審査会を振り返ると、結果としてはどの受賞作家も一様に国際的な水準にある点が強く印象として残っている。我が国唯一の国際写真フェスティバルと一卵性双生児でもある東川賞にとって、きわめて満足のゆく審査結果であったことを記して、報告を括りたい。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉

〈第12回〉

選評 第12回東川賞について

東川賞審査会・幹事委員 平木 収

本年で第12回を迎えた東川賞の選考会は、昨年度までで任期を全うされた植田正治委員の後任として、また一昨年来空席になっていた委員1名分を合わせて、2名の新任委員が加わり、例年通り、事前に全国の関係諸氏にお願いしたノミネートに沿って取り揃えられた作品資料を前に、厳正な協議が行われた。

その結果、本年度の国内作家賞は、久々に大作『ラスト・コスモロジー』（1995. 11 横浜ランドマークタワー・タワーギャラリー、写真集も刊行）を発表し、デビュー作『地図』（1961年）以来、一貫して人間の意識空間とそれを超越した精神の領域に挑む写真表現を続けている川田喜久治氏に贈ることになった。『ラスト・コスモロジー』とは、文字通りの“最後の宇宙論”と、比喩として、人間社会の行く末に関する作者の想念が複合した作品である。今世紀最後の金環食など、天体の運行に現れる諸々の現象と、時の移ろいの節目の世紀末を組み合わせて、この壮大な宇宙の規模を表現しながら、そこに生を営む人間という生物のあまりのはかなさと、それゆえの日常の尊さを詠った、写真による一大叙事詩といえる大作である。

ところで、前述の新任の審査委員2名とは、美術評論家の岡部あおみ氏と、もうひとりが写真家の川田喜久治氏そのひとであり、新任の川田氏は、初めての審査会で自らが審査の対象となることにあいなった。しかし既任の委員全員と岡部氏は、川田氏の審査対象の写真展が委員就任委嘱前に行われていること、また、その作品の完成度がきわめて高いことなどを考え合わせると、この機会に東川賞国内作家賞を川田氏に授与するのが妥当との結論に達した。この決定は、あえて作品水準を一義とした当審査会の態度として理解していただきたい。

海外作家賞については、本年度は東西統一後5年を経た新生ドイツに目を向け、事前調査を経て、委員会から山岸享子委員が昨年12月に、ベルリン、ケルン、フランクフルト、エッセン等、直接現地に赴き、美術館やギャラリー、芸術家協会等関係施設と機関をめぐって収集された資料をもって選考の材料とした。

その結果、旧東ドイツのエルフルト生まれの女性写真家グンドゥラ・シュルツェ氏に対して授与することになった。

ドイツ圏の創造的な写真活動の現況は、大きく2つないし3つの流れがある。なかでも活発なのは、デュッセルドルフの国立芸術大学を拠点とするベッヒャー教授夫妻の学生たちの系列で、また一方では、ベルリンを中心にドキュメンタリー作品で世界観の提示を志す写真家たち、そして、そのどちらにも属さないシリアスな写真家たちが、いわば割拠している。そうしたなかでシュルツェ氏は、独立した存在としての作家活動を続けていて、東西統一以前の東側国家に育ったことにより、一種抑圧された精神の内抱する問題と、統一後に現前した社会の諸問題、ひとりの女性としての死生観や性および性差の問題などを、精神の緊張感と独創性の高い視座で統合して、今日のドイツにおける人間社会のなんたる

かを表現している写真家である。この国際的にも発言力を育みつつあるグンドゥラ・シュルツェ氏に本年度の海外作家賞を授与することに決定した。

新人作家賞は、昨年も候補に上がりながら、今後の継続性を注目ということになり、この一年の活躍が期待された松江泰治氏に決定した。松江氏の作品は近年、無機的で荒涼とした山岳地形や砂漠などをモチーフとして展開されているが、キプロスやカナリア諸島、トルコのアナトリア地方など、我々の日常とはかけ離れた地点のその異質な風景が、従来の風景写真の常識を越えた、新しい次元の景観写真を実現させている。それは眼前の光景の美しさを確かめ、その美を多くの人間で共有しようとする風景写真ではなく、広漠とした大地の広がり、それを見る者が呑み込まれ、自らの居る場所を見失うような、独特の効果を生む作品群で、見る者を眩惑させ、新鮮な驚きをもたらしてくれる。対象作品は川崎市市民ミュージアムのグループ展出品作、ツアイト・フォトサロンでの個展等で、実際にオリジナル作品に接した委員からの詳細な説明により、印刷物でしか作品を見ていない委員にもその水準の高さが理解され、新人作家賞に決定した。

北海道に関係した写真家や写真活動に対して贈る特別賞は、水棲生物、とりわけ海洋生物のスペシャリストである中村征夫氏に決定した。対象となった作品は、北海道沿岸の海を舞台として撮影された海洋生物の美しい生態写真集『カムイの海』（朝日新聞社刊）で、冷たく厳しい北の海の水中が、いかにバラエティー豊かな水棲生物の楽園であるかを覗かせてくれた。その写真表現はカラフルなだけでなく、ユーモラスでもあり、見る者を楽しませてくれる。センスの良さとおおらさが際立っており、自然と生命の尊さを再認識するうえに、貴重な労作である。なお、本賞を道外出身者で非在住の写真家が北海道をテーマや題材とした作品で受賞されるのは初めてのケースとなった。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉



〈第13回〉

選評 第13回東川賞について

東川賞審査会・幹事委員 平木 収

例年、まさに優れた業績で広く社会の文化に貢献された写真家諸氏を顕賞している東川賞も、1985年の制定から回を重ねること、早13回を数えるに至った。

今年も、去る2月中旬、全国の写真関係有志のご協力を得てノミネートされた候補作品並びに資料を取り揃えて、審査委員一同と東川町の事務担当者が東京渋谷に会し、厳正な審査が行われた。

その結果、本年度の東川賞国内作家賞は、永きに亘って全地球規模のダイナミックな取材活動を通じて、我々に世界の広がりや人類の尊厳を伝え続けてきた写真家・野町和嘉氏に贈ることに決まった。野町氏は、並はずれた行動力と忍耐力で砂漠地帯や高山高地を始め、極地に暮らす人々の日常とその文化を暖かく見つめ、かつ壮大に描写することを特長とする、きわめて正統派のフォトジャーナリストで、昨年はその一連の仕事の中でも代表作とも言える「サハラ」を写真集として上梓し、また新年早々に大規模な写真展を開催し、好評を博した。衛星中継のテレビ報道が日常化し、インターネットのコミュニケーション網が日々密度を上げている今日だが、人体の原寸大のスケールを出発点とし、地道な旅の踏破を抜きには知りえないこの地球の広さと、人間という生物の奥の深さを語り続ける氏の活動には、今後も注目したい。

東川賞海外作家賞は、写真発祥国のひとつでもあるイギリス（大ブリテン及び北アイルランド連合王国）とアイルランド共和国に焦点を合わせ、昨秋11月に東川賞審査会から平木が現地に渡航し、1週間あまりの調査と取材を行った。ロンドン、エディンバラ、グラスゴーなどの諸都市で美術館、ギャラリー等を巡り、収集した候補作品資料は約40件で、そうした中から今年度の受賞者は、グラスゴー出身で、現在スコットランドの首都エディンバラ在住のカラム・コルヴィン（Calum COLVIN）氏に贈呈することに決定した。

イギリスは、写真術発明者のひとりタルボットが、つとに写真を芸術的な目的に用いることの意義を力説した伝統を持つ国柄だが、コルヴィン氏の仕事はまさにその栄えある伝統の上に位置づけられるもので、しかも斬新でユニークである。

弱冠36歳だが、深く宗教や人間精神の内奥を司る神秘的な宇宙観に興味を寄せる同氏は、中世フランドルの画家ヒエロニスムス・ボッシュに啓示を受け、キリスト教にいう原罪の「七つの大罪」を主としたモチーフを展開し、独自の作品を創作する。英国内のみならずヨーロッパ、アメリカでも注目を集め、今日までの業績ともどもその今後の制作にも注目すべきものを持つ器の大きいアーティストである。

技法としては、玩具や日用品を構成し、自らの絵画も加えて神秘的な情景を創り出して撮影し、写真印画に仕立てる、いわゆるコンストラクティッド・フォトを行っている。16世紀にローマ教皇庁を離脱したイギリスは、微妙に他国とは異なるキリスト教文化を有する国だが、コルヴィン作品はそうした文化的特質の理解や美学の多様性を知ることにも資するものと言えよう。審査会でもそうした点が評価された。

本年度の新人作家賞は、東京都出身の新鋭金村修氏に決定した。金村氏は、80年代末から今日の都市の裏面や縁辺に着目し、その猥雑な様相をひたすら凝視してきた異色の若手写真家である。

そもそも金村修氏のデビューは、1992年に開催されたオランダはロッテルダムのビエンナーレだった。それをはずみに、都市の混沌と猥雑を活写することで、近代、そして現代のアジア的都市の生成と、その遅しくまた同時にある種の哀愁をたたえた都市の相貌の表現者として、その実力が知れ渡るようになった。ことに昨年神奈川県鶴見で開催した個展、『京浜マシンソウル』は、都市を語る写真の新次元を予感させる域に達するものとして、注目を集めた。

さて、東川賞各賞のうち北海道に関わる写真家に贈られる特別賞は、札幌市出身の写真家齋藤亮一氏が受賞することになった。同氏は、日本大学在学中から三木淳氏に師事し、三十歳代に入るところからすでに人間の運命、あるいは人生の意味を吟味しようとするような作風に達している。近年、『如是一生命記憶への旅』と題した写真集と写真展で、人間にとって「命」とは何か、その普遍的な意味を問おうとしたのに続き、去年は足繁く旅に出た北の大地、ロシアとそこに生きる人びとに共感をこめた視線を注いだ写真作品『ノスタルジア』を発表、その感受性の豊かさを披瀝した。北海道育ちであるという原体験に発した思いからだろうか、ロシアの悠久の時の流れに身を委ねて生きる人びとへの氏の気持ちが、よく伝わる秀作である。この齋藤氏が本年度の特別賞であり、他の各賞共々、選考の結果をここに悦びとともにお伝えする次第である。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉

〈第14回〉

選評 第14回東川賞について

東川賞審査会・幹事委員 平木 収

例年、全国の写真関係者に受賞候補写真家とその作品をご教示いただくノミネート制で行っている東川賞だが、まずはノミネーターの諸兄諸姉の真摯で熱意あるご協力に感謝したい。本年度で14回目を迎えた東川賞の選考会は、去る2月17日、東京の渋谷に審査委員全員が集い、ノミネートを寄せていただいた候補作品群を直に検討、協議を重ね、次のように決定した。

秀れた写真作品制作の業績をあげている日本国外の写真家を対象とした海外作家賞は、アメリカ合衆国在住のアンソニー・ヘルナンデス氏に贈られる。ヘルナンデス氏は1947年ロサンゼルス生まれ。大学生時代に軍役につき、ベトナム戦争に参戦した経歴を持つ、まさに20世紀後半の激動を、身をもって体験した人物である。復員後写真制作活動に専念し1970年代の中葉から活発な制作発表を続けてきた。

今回の選考審査で氏の業績を評価する材料となった作品は、「ホームレスの風景」(“Landscapes for the Homeless”)と題されたカラーのシリーズ作品だった。ひとそれぞれの人生、ひとひとりびとりの生き方を尊重しあうことは、人間社会の自然で基本的なルールだが、ヘルナンデス氏は、上記の作品で自らの意志で家族や一般社会に背を向けて暮らすひとたちの、日常の視界やその居住まいの風景を、丹念にドキュメントしている。人間の姿は直接撮られていないものの、人間の存在感を語り、また同時に人間の共生空間である社会という構造体、組織体の重苦しさ、そしてそこに生まれる矛盾や葛藤を如実に物語る作品で、芸術のための芸術というたかをくくった態度などみじんもないヒューマンな作品である。写真表現の可能性を堅実にうがった作品とその制作の姿勢が今日の授賞の決め手となった。

なお本年の海外作家賞の候補者選定の地域は、写真芸術全般を先駆的にリードしてきたアメリカ合衆国が当てられていたが、審査会から山岸享子委員が現地に赴き、東海岸、中部、南部、そして西海岸と広大な対象地域をきわめて効率的に精査、情報収集され、審査会に現代アメリカ写真界の知的で先端的な状況をもたらすという労をとっていただいた。

国内作家賞は、アジアのカオスに迫り続けている写真家管洋志氏に決定した。管洋志氏は、フォトジャーナリストとして雑誌などの出版媒体を通じて、つとに作品発表を続けているが、わけても近刊の写真集「ミャンマー黄金」の出版と同タイトルの写真展は出色であった。すでに東南アジア各地や日本国内では日光など、宗教的かつ美的に表象性の高い文化を直視する作品で定評のある写真家である氏は、なによりも対象を大切にす。写真の撮り手がレンズの前の世界を解釈するのではなく、写真家自身がカメラを手に、その世界に分け入り染まり、酔い、そして現認報告をするという方法論で、彼はアジア的な共感や同情を、そして生の息吹をみごとに伝えてくれる。「ミャンマー黄金」では政情がまだまだ動揺を続けるその国に対して、“現在”を超越した人間と文化、その背景を麗しく飾る歴史に焦点が合わされている。このように管氏の作品は、アジアという世界の魅力と不思議さ

を、そして悦しさを普遍的な次元で世界中に、また次代に伝える貴重な仕事と評価され授賞の運びとなった。

新人作家賞については、また特段の喜びをもって受賞者を紹介したい。兵庫県の出身で現在は青森の十和田市に在住する細川剛氏が本年度の受賞者である。細川氏の業績を我々に知らしめてくれた作品集は「森案内」と題された一冊の写真集である。正直なところ本年度の新人作家賞候補は、力のある若手写真家が複数名、審査線上でせめぎ合っていて混迷の感もあったが、ある一瞬、細川作品が全員の関心を独占した。そのきっかけとなった写真集は、明らかに森林をモチーフにした、いわゆるネイチャー・フォトである。撮影地は八甲田や白神、焼石山塊など、東北の山岳地帯で、それぞれ季節感も豊かな美しい映像ばかりである。しかし、そうした表層的な説明では語り尽くせない大きな力を持っているのが「森案内」である。それは作者自身が森へ誘ってくれ、そこを案内してくれるのかといえば、そうでもあるが、そうでもない。まずは森に案内される、ということのすばらしさをこの写真家は表現する。そして森とは何か、人間と森との結ばれや森林の奥で人間が知覚できる生命というものの実体を、淡々と、しかし非常に濃密に語ってくれる。巨木群から小さな昆虫や微生物といってもいいささやかな命まで、細川作品は一大叙事詩のように森林の自然で雄大な命を、まさに謳歌する。そのまなざしと感受性は、もともと獣医の道を歩んできたものならではの科学性に裏打ちされてはいるものの、自然信仰や山岳文化といった日本人の心の問題へも踏み込む質の高さがある。自然豊かなゆえに、今日の文化、文明の恩恵に浴している我が国が、世界に誇りうる新人作家といえよう。

さて、北海道に関わる写真の業績を対象としている特別賞の本年の受賞者は、建築文化という面から、北海道の歴史と文化、そしてその風土の独自性を描きだした写真家津山正順氏に贈呈することになった。津山氏は北海道建築士会の檜山支部が刊行した二巻の長大な資料集成の写真を担当されている。ちなみに檜山地方とは北海道の南西部、渡島半島の日本海に沿った地方を指すようで、その一帯には近世のニシンの黄金時代の遺構が数多く残されている。津山氏はそうした遺された建造物を介して民俗学的な視野を開くべき資料集成を1980年代末に上梓され、その後公共建築である社寺のたたずまいを綴った写真集を公刊している。共に民俗学者、建築史家、郷土史家らとのコラボレーション（共同研究）のうえに成立したものだが、純粹で濁りのないそのカメラアイは、北海道という地方の、そして檜山という象徴的な地域の朴訥さとスケール、またダイナミズム、しかし日本的なるものの強く芳しい香りを、けれん味なく捉えている。この規模の大きな「檜山民俗建築照相譜」と「檜山社寺建築照相譜」の二つの作品が特別賞の対象となったことは、本賞設定の趣旨を十二分に活かす決定であると、審査会一同自負を持っている。が、この仕事は、北海道という日本の近代をある意味で象徴するテーマを深く掘り下げている点からして、その仕事は汎日本的な質を確実に備えていることを付記しておこう。

本年もユニークかつ充実した質の高い諸作品を顕彰することができる喜びを、ここに報告させていただく次第である。

〈ひらき・おさむ/写真評論家〉